



ニュースレター 2015.02.発行 NO.12

一般社団法人エビデンスに基づく統合医療研究会(eBIM 研究会)

理事長 伊藤壽記 事務局長 梅名義昭

大阪大学大学院医学系研究科 統合医療学寄附講座内

〒565-0871 吹田市山田丘2番2号 TEL 06-6879-3498

URL:<http://www.ebim.or.jp/>

運営事務局：日本コンベンションサービス株式会社 (担当：宇田川、中村)

〒541-0042 大阪市中央区今橋4-4-7 京阪神不動産淀屋橋ビル2階

TEL：06-6221-5933 FAX：06-6221-5938 Email：ebim@convention.co.jp

第18回日本統合医療学会 (IMJ 2014)、第17回日本アロマセラピー学会学術総会ひらく 大会テーマ 統合医療の世紀「健康長寿の社会」

第18回日本統合医療学会 (IMJ 2014)、第17回日本アロマセラピー学会学術総会が昨年12月12月20日(土)・21日(日)、パシフィコ横浜 会議センターで開催され、1000名が参加した。

大会テーマは『統合医療の世紀「健康長寿の社会」』。大会長の塩田清二昭和大学医学部顕微解剖学教授は、挨拶の中で『本年度の統合医療学会のテーマは“健康長寿社会の実現”である。超高齢化社会がすでに現実となっている日本において、いかに健康で長寿を全うするかということは、医療の世界のみならず、大変大きな社会問題となっている。統合医療は、まさにこの点において大変重要な役割を演じることは間違いない』と強調。本大会の特色として第17回日本アロマセラピー学会学術総会 (大会長昭和大学薬学部の荒川秀俊教授) との共同開催であると強調、『統合医療のなかでアロマセラピーは重要な位置を占めている』と述べた。

【写真】日本統合医療学会 仁田新一理事長、同 塩田清二大会長、同 伊藤壽記業務執行理事 (当研究会理事長)



■研究会からのお知らせ

○第4回エビデンスに基づく統合医療(eBIM) 研究会学術集會を次の要領で開催します。

- ・日程：2015年8月1日(土)、2日(日)
- ・会場：リーガロイヤルNCB

(中之島センタービル内：前回と同じ会場です)

○当研究会事務局が置かれている「生体機能補完医学寄附講座」が、2015年1月より「統合医療学寄附講座」に名称変更されました。

会期中、第1会場では「未来型医療の在り方と統合医療」、「働く女性のこころとからだのクライシス」、4つの合同シンポジウム「統合医療におけるエビデンスとアート」「生活習慣病に対する臨床アプローチ」「うつ病に関する臨床アプローチ」「がん・悪性腫瘍に対する臨床アプローチ」が開かれた。第2会場では、6つのシンポジウム「在宅ケアにおける統合医療～地域包括ケアを目指して～」、「プライマリ・ケアの視点から～統合医療における多職種協働（IPW）～」、「全人的ケア～病名にとらわれない看護」、「伝統医療・補完代替医療の安全性：現状と対策」、「筋・骨格・関節疾患に対する統合医療」などが開かれた。第3会場では、4つのワークショップ「日本における統合医療の臨床実践モデル(クリニックでの取り組み)」、「同(病院での取り組み)」、「社会(生活)モデルとしての統合医療に必要な視点」が開かれた。

とくに第1会場の「未来型医療の在り方と統合医療」において、仁田新一日本統合医療学会理事長は、『大震災での被災や高齢化社会への対応など新しい医療体系がもとめられている。特に人手不足、医療費の増大、難病・こころの病気、医療材料や方法論などの医療資源の枯渇がクローズアップされ、これらに対する早急な施策の策定や実行が求められ、この解決策として新しい未来型医療の統合医療が有力な方法論となっている』と述べた。

また、伊藤壽記同業務執行理事は、『我が国は、一気に超高齢化社会に一気に突入している。近代西洋医学だけでは自ずと限界があり、新たな医療体系の構築が必要である。cure を目指した 20 世紀の「病院完結型」医療から、care を目指す 21 世紀型の「地域完結型」医療へのパラダイムシフトが考えられる』として、『統合医療は現行の医療と CAM を融合させた、これからの医療の方向性を示す一つの医療体系である。統合医療の実施にあたり、医師中心の集学的チーム体制で疾病に対応しようとする“医療モデル”と地域のコミュニティが主体となって QOL の向上を目的とした“社会モデル”との両面で検討し、その上で相互に連携した新たなコンソーシアムの創生が必要』と述

べた。

○統合医療の臨床実践モデル（クリニック事例）

【写真上】左より 座長 鈴木先生、林先生

【写真下】左より 小池先生、福岡先生、山本先生



ワークショップ「日本における統合医療の臨床実践モデル(クリニックでの取り組み)」では、座長：鈴木清志先生(東京療院・MOA 高輪クリニック院長/ (財) MOA 健康科学センター理事長)、林紀行先生(大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座寄附講座助教(精神医学教室兼任))のもとに、以下の4名の事例が報告された。

- 鈴木清志先生 (MOA 高輪クリニック院長)
- 山本竜隆先生 (朝霧高原診療所・富士山静養園)
- 福岡博史先生 ((医社)明徳会福岡歯科理事長)
- 小池弘人先生 (小池統合医療クリニック院長・群馬大学医学部非常勤講師)



■第12回日本機能性食品医用学会総会ひらく

～機能性表示制度の改革などを議論～



第12回日本機能性食品医用学会総会が、昨年12月13日（土）・14日（日）の2日間、国立京都国際会館で開催された。会長の吉川敏一先生（京都府立医科大学学長）は、挨拶のなかで、『機能性食品という言葉は、我が国で使われ始めたものであるといわれ、欧米でも“functional food”として学会等で一般的に使われている。わが国では「特別用途食品」「特定保健用食品」「健康食品」などが含まれるが、本学会はこれらを科学的に研究し、科学的に実証された機能性食品の医用普及により国民の健康促進ならびに生活習慣病の予防に役立つことを願って設立された。今回は、特に食品が有する様々な機能に関してはその成分について、作用するメカニズムの解析、含有量の分析、安全性の評価、さらには有用な機能をもつ食品の開発など、多くの解決すべき課題がある。（略）本総会では食品のもつ様々な作用について多角的にかつ科学的に検証することを目的として、メインテーマを「“食”を科学する！」とした』と強調した。

とくに、今年4月から一部のいわゆる健康食品に対して従来禁止されてきた機能性表示が容認されることから、シンポジウム「食に対する機能性表示容認を、どう生かすか？」のなかで、森下竜一（大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学）、伊藤壽記両先生が座長となり、次のテーマが報告され議論が行われた。

○いよいよ始まる機能性表示制度の概要とその期待

森下竜一先生（大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学）

○食育における「機能性おやつ」の意義

矢澤一良先生（早稲田大学ナノ理工学研究機構）

○内臓脂肪とアディポネクチンをターゲットにした戦略

前田和久先生（大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座）

○農林水産省における機能性表示に向けた取り組み
島田和彦氏（農水省農林水産技術会議事務局）

○健康食品産業は“新”機能性表示制度をどう活かすか？
駒村純一氏（森下仁丹株式会社）

■「緩和ケアにおける統合医療とヨガ療法」



【写真】今西二郎先生、中井吉英先生、伊藤壽記先生

昨年11月9日（日）、日本統合医療学会京滋支部・阪奈支部及び阪奈支部ヨガ部会合同総会が、明治国際医療大学明治アニバーサリーホールにおいて開かれた。テーマは、「緩和ケアにおける統合医療とヨガ療法」。前半、柏木 哲夫先生（金城学院学院長、淀川キリスト教病院理事長）が、テーマ「日本における緩和ケアの現状と未来」について特別講演した。

○柏木哲夫先生の特別講演（以下、抄録抜粋）

『日本における緩和ケアの現状と未来を考えると、緩和ケアの5つの基本的な原則を頭に入れておく必要がある。(1)クオリティ・オブ・ライフの重視。ケアを提供するものは自分の価値観を患者に押しつけないように特に配慮しなければならない。そして、適切で良好な症状マネジメントはその重要な要素となる。(2)全人的アプローチ。身体的な苦痛のコントロールはもちろんのこと、精神的、社会的苦痛、さらにスピリチュアルペインにも配慮する。(3)患者とその人に関わる人たちの両

者を包含するケア。「家族と友人」もまたケアにおいて同様に重視されるべきである。(4)患者の自律と選択を尊重する。患者が何を望むかを明確にし、その目標の達成を援助するために、個別的、創造的に対応する。(5)率直かつ思いやりのあるコミュニケーション。終末期における予後の告知のような困難な課題について、率直かつ思いやりのある話し合いこそが、死期の迫った人々から感謝される。』

それを受けて、シンポジウム「緩和ケアにおける統合医療とヨガ療法」が開かれた。演者は次のとおり。

- 今西二郎先生（明治国際医療大学附属統合医療センターセンター長、教授）
- 中井吉英先生（関西医科大学名誉教授、洛西ニュータウン病院名誉院長・心療内科部長）
- 伊藤壽記先生（大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学寄附講座教授）
- 木村慧心先生（一般社団法人日本ヨガ療法学会理事長）

■第7回統合医療セミナーひらく

ストレスに対する漢方治療～癌患者を中心に～



11月11日（火）、大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学寄附講座は、第7回統合医療セミナーを開催し、「ストレスに対する漢方治療～癌患者を中心に～」と題して、星野恵津夫先生（（公財）がん研有明病院 漢方サポート科部長）が講演した。演者は、がん研有明病院において8年半にわたり多数のがん患者を診療する中で得た様々な治療を紹介、癌以外のストレス関連疾患にも応用できるとした。（以下、抄録抜粋）

『自然災害や事故と同様に、癌は人に大きな肉体的・精神的なストレスを与える。癌と治療による過度のストレスは、免疫力を低下させ、患者の

予後を悪化させる。漢方薬の多くは生体の中枢である神経・免疫・内分泌系への作用を介して、二次的に効果を発揮する。漢方ではストレスが心身に及ぼす影響を「気」という概念で捉える。気は身体内を流れる目に見えない流体であり、西洋医学的に解釈すると中枢・自律神経および内分泌系の機能である。気の異常は、「気虚」、「気滞（気鬱）」、「気逆（気上昇）」に分類され、それぞれ補気薬（人参・黄耆など）が配合された「補気剤」、理気薬（柴胡・陳皮など）が配合された「巡気剤」、降気薬（桂枝・半夏等）が配合された「降気剤」が用いられ、複数の機能を有する漢方薬（補剤、駆瘀血剤など）多数存在する。』

■第17回市民開漢方セミナーに市民多数参加

昨年11月20日（木）、大阪国際会議場において、一般市民を対象とした市民公開漢方セミナーが、日本漢方生薬製剤協会の主催で開催された。テーマは、「漢方に教えられたこと、気づかされたこと」。演者の萩原圭祐先生（大阪大学大学院医学系研究科漢方医学寄附講座准教授）は、漢方医学と蘭方の組み合わせに強い大阪の歴史や「傷寒論」などの漢方の基本を紹介、さまざまな症例に対する漢方治療を、参加した市民に大変わかりやすく講演した。また、萩原先生は今年1月にも、大阪ガスと大阪大学 21世紀懐徳堂が開催した食をテーマにした「アカデミッククッキング」にて講演した。

■共同国際会議 2015 開催のお知らせ

2015年5月8日（金）～10日（日）、神戸ポートピアホテルにおいて、次の3つの学会が共同開催される予定です。共同テーマは『生命の円卓～見直される伝統医学の本質的効果～』。

◎第37回日本アーユルヴェーダ学会

「～長生きは五感の健康から～
シヤラーキャ・タントラム特集:理論と実習」

◎第13回日本ヨガ療法学会研究総会

「がんと向き合う～ヨガ療法の可能性」

◎第2回日本健康促進医学会学術総会

「"未病治療"という新しい考え方」

問い合わせ先：共同国際会議 2015 現地事務局

e-mail : kobeyoga2015@gmail.com

（以上）